

平成30年度入学（一般入試 後期日程）試験問題の出典

社会福祉学部

種別	大問番号	著者名	著作物名	書名等	版元
小論文	一	長田 弘	なつかしい時間	岩波書店, 2013年より	岩波書店

平成 30 年度 一般入試・後期

社会福祉学部

小論文 (90分)

注意事項

- 1 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
- 2 この冊子は、2 ページあります。なお、下書き用紙が 2 枚あります。
- 3 試験中に問題冊子及び解答用紙の印刷不鮮明、ページの脱落などがあった場合は、手を挙げて試験監督者に知らせなさい。
- 4 解答は、必ず黒鉛筆(シャープペンシルも可)で記入し、ボールペンや万年筆などを使用してはいけません。
- 5 解答用紙には、氏名及び受験票と同じ受験番号を忘れずに記入しなさい。
- 6 解答は、必ず解答用紙の指定された箇所に記入しなさい。
- 7 下書きの必要があれば、下書き用紙を利用してかまいません。
- 8 試験終了後、問題冊子と下書き用紙は持ち帰りなさい。

問題訂正

○訂正内容

教科名 小論文

ページ・行 2ページ・14行目から15行目

誤)

……ゆっりと……

正)

……ゆっくりと……

次の文章を読み、あとの問いに答えなさい。(配点 200 点)

どんなにゆたかになり、どんなに進歩し、どんなに技術が新しくなっても、変わらないものがあります。1日の時間です。

1日は朝と昼と夜でできていて、1日は24時間であるということ。この、変わらない1日の時間、変わりばえのしない1日の時間を、わたしたちがもちうるゆたかな時間にしてきたのは、1日の特別な時間^①です。

特別な時間というのは、1つは、ゆるやかな時間です。夜あけ、曙、朝ぼらけ、朝まだき、朝一、朝っばら、昼前、昼やすみ、昼過ぎ、昼さがり、お茶(の時間)、日の暮れ、たそがれ、夕まぐれ、時分時、食事時、あるいは、夜半過ぎ、丑満時、真夜中、などなど。

そういったあいまいなといていい言葉で表されてきた、あるいはそういった言葉でしか表せないような、微妙な時間。はっきりした時刻をもたない。けれど、誰にもはっきりと感じられる、ゆるやかな時間。そうしたゆるやかな時間が、わたしたちの1日の時間にもたらしてきたのは、時間と時間の間の時間、時の間をつくる時間でした。

そういった時間は、何でもない、平凡な時間のようにしか思えないかもしれません。けれども、どんな変化によっても変えられない1日の時間が、すべてデジタルで、しっかりと表されるようになったいまは、そういったあいまいな、ゆるやかな、しかしゆっくり何か充たされてくるような、時間の間の時間が、陰影やニュアンスや推移をはぐくむ間をもった時間の感覚が、ひどくもちにくいものになってしまっています。

昼さがりは、1日のどの時間になるのか。たそがれは、時分時は、1日のいつの時間のことか。頃合いというような時間の目盛りは、どうやって測るのか。そういった時間の数え方そのものが、いまはもう無効になっているのかもしれません。

もう1つ、わたしたちの1日の時間をゆたかにしてきた、特別な時間があります。特別な一瞬という時間です。そのときは気づかないけれど、あとになって気づく、「あの一瞬」といえるあざやかな時間もまた、変わることはないわたしたちの1日をゆたかにしてきた時間です。たとえば、ちょうどサッカーで、ゴールが決まったときのようなあざやかな一瞬が、試合全部の時間をゆたかな記憶に変えることができるように。

しかし、1日の時間のなかの特別な一瞬というのは、スポーツの場合のように待ちのぞむ劇的な一瞬でもなければ、その一瞬のためにできることをする目標でもありません。そうではなく、もっとずっと平凡で、あたりまえで、そうと意識しなければそのまま過ぎてしまう、そんな一瞬にすぎません。それが、どうして特別な一瞬になるのか。

『人生の特別な一瞬』(晶文社)という詩文集に、じぶんで書きとめた覚書。

人生の特別な一瞬というのは、本当は、ごくありふれた、なにげない、あるときの、ある一瞬の光景にすぎないだろう。そのときはすこしも気づかない。けれども、あるとき、ふっと、あの

ときがそうだったのだということに気づいて、思わずふりむく。

ほとんど、なにげなくさりげなく、あたりまえのように過ぎていったのに、ある一瞬の光景が、そこだけ切りぬかれたかのように、ずっと後になってから、人生の特別な一瞬として、ありありとした記憶となってもどってくる。

特別なものは何もない、だからこそ、特別なのだという逆説に、わたしたちの日々のかたちはささえられていると思う。

逆説の時代に、わたしたちは生きているのだと思います。大きな電車事故のニュースのような、突然の悲惨な出来事が伝えるのは、実は、事故や事件によって当事者たちから失われる最大のものが「1日の平凡な時間という特別な時間である」という、不可逆的な事実です。

人生というのは人の、日々の時間に対する態度のことだ。——夏目漱石は、確かそういう意味の言葉を、『道草』という物語のなかにのこしています。しかし、わたしたちの1日の時間をゆたかにしてきた、ゆるやかな時間、そして一瞬という特別な時間は、いまはとても実感しにくい、失われゆく時間になってきています。

日々の時間に対する態度を変えてゆかなくてはいけない。時間を細切りにしないで、大きく、ゆっ②りと、1日の特別な時間を手にしてゆくことができなくてはいけない。そうでなければ、わたしたちの感受性はどんどん貧しくなっていってしまう。

たった1つの時間だけがあるわけではありません。水辺には水辺の時間があります。緑陰には緑陰の時間があります。夜には夜の時間があり、対話の時間もあれば、孤独な時間もあります。それぞれの時間は、それぞれに時間の数え方がちがうのです。時間の数え方をたくさんもっているほど、人は1日の特別な時間をもつことができる。そう言っているいいのではないのでしょうか。

(長田弘『なつかしい時間』, pp. 139-142, 岩波書店, 2013年より, 一部改変)

問 1 下線部①「1日の特別な時間」を作者はどのようなものだと考えているか。130字以上150字以内で述べなさい。

問 2 下線部②「日々の時間に対する態度を変えてゆかなくてはいけない」とあるがそれは何故か。作者の意図を説明し、その上であなたの考えを600字以上800字以内で述べなさい。